

ゲート

自衛隊 彼の地にて、斯く戦えり

2. 炎龍編〈下〉

柳内たくみ Takumi Yanai



アルファポリス文庫

Main Characters
主な登場人物



くろかわ りり
黒川茉莉

23歳。自衛官。
毒舌だが
看護師の資格を持つ。



くらた たけお
倉田武雄

21歳。自衛官。
ケモノ娘萌で伊丹とは
オタク仲間。



いだみ ようじ
伊丹耀司

33歳。陸上自衛隊二等陸尉、
第三偵察隊隊長。
オタク趣味の持ち主。



やなぎ あきら
柳田明

陸上自衛隊二等陸尉。
防衛大卒のエリート。
伊丹とはあらゆる面でも対照的。



くりはら しの
栗林志乃

24歳。
格闘徽章を有する自衛官。
小柄だが巨乳。



レレイ・ラ・
レレーナ

15歳。
ヒト種の賢者、魔導師。
頭脳明晰で無表情な少女。



メルソー・ルナ・
マルソー

165歳。
エルフ上位種族の娘。
金髪碧眼でスタイル抜群。



カゼル・エル・
カエサル

モルト皇帝の長子、
ピニヤの兄。残虐な性格で
臣下からも恐れられている。



ヤオ・ハー・
デュツシ

315歳。美貌のダークエルフ。
「緑の人」を探して
アルヌスを訪れる。



ピニヤ・
コ・ラーダ

19歳。
モルト皇帝の娘。
騎士団を従える女傑。



マウリイ・
マウリイ

961歳。
神エムロイに仕える巫神。
フリフリの黒ゴス神官服を纏う。

09

「ピニャー！」

「ディアボ兄様……どうされたのですか？」

慌てふためいてやって来る次兄を、ピニャは足を止めて待った。

いたずらに時間ばかり費やす議會を終えて、元老院議員達は今後の方策やら意見を互いに語りながら歩いている。その流れに逆らって、突然立ち止まった彼女によって、元老院議事堂跡地の回廊に、はた迷惑な渋滞が発生した。

かつて天井のあった場所は空に変わり、その空にも星が瞬く頃合いである。

突然の混雑によって肩をぶついたり、押し合ったりで、手にした松明から飛び散った火の粉を浴びた壮年やお年寄りの議員達が、慌てふためいたり、眉を寄せたりしながら、ピニャの傍らをすり抜けていった。

そんな人の群れの中からピニャを捕まえたディアボは、他人の耳がある廊下を避けて、

かつて小部屋があった場所へと連れ込んだ。そこは破壊された議事堂の中でも、比較的損傷が少なくて三方に壁が残っていた。内緒話をするには充分だろう。

「ゾルザルについてお前知っているか？」

「ええ。父上も兄様の立太子を決められ、帝位の継承が明らかとなりました。妾も一心です。それが何か？」

「あの馬鹿が、何をトチ狂ったのか父上と張り合うつもりだ。この俺にもどっちに付くか旗幟を鮮明にしておくよう言い放ちやがった」

ゾルザルの部屋であった出来事を話して聞かせるディアボ。

だが、ピニヤは次兄の言葉を理解するのに少しばかり時間を必要とした。

「……あの、実に兄様らしからぬ振る舞いですね。皇太子になっていよいよ増長して威張るとか言うなら分かるんですが。そのような賢しらかな言動はものすごく違和感があります」

「俺もだ……いったいどうなってる？」

「妾に判じようがありませんか？ それに兄様がいずれ皇帝に成られると言っても、父上の後見・監督を得てのこと。張り合えるはずがありません。いったいどうするつもりなのでしょう」

「当面の間は雌伏して機を窺うつもりらしいが」

「そのままずうつと雌伏してはくれないということですね？」

ディアボは砂を吐き捨てるかのように言った。

「世の中には二種類の馬鹿が居る。一つは、自分が馬鹿であることを知っている、すなわち賢い馬鹿だ。もう一つは、自分を賢いと思っている本物の馬鹿だ。あいつはどうやら後者らしい」

「父上は当面は自分が後見して、自分亡きあととは、ディアボ兄の補佐で帝国を運営していくことを期待している……と、思っていたのですが」

「この俺が、アレの補佐だどっ!? そんなこと聞いておらぬ。この俺が、なんだってあいつの補佐を引き受けねばならんだっ! それならばこの俺が皇帝となっても良かったではないか! くそっ、父上も早まった真似をっ!」

怒りに駆られたディアボは、崩れかけた壁を殴りつけた。弱っていた漆喰がその衝撃で崩れて埃が舞い散った。

「兄様。帝位の継承は長子相続こそが説得力を有します。人柄や能力の有無は、普段接する立場にない民草には理解できません。兵士達もです。ここで序列を乱して、能力の優劣によって帝位が得られるとなれば、自負心を持つ者なら誰しも『我こそは』と思う

もの。そうなれば、国は千々に乱れましよう。

無論例外もあります。それ故に父上も、ぎりぎりまで迷っておられたのです。ですが、この国難の最中、次子を後継に選んで兄弟が唾み合う事態になれば、いよいよ帝国が危うくなります。それを考えれば、ゾルザル兄様が帝位に就かれたほうがよっぽとマシだと思われませぬか？

ディアボ兄様は、ゾルザル兄様の背中しか見ておられぬようですが、ディアボ兄様の背中を見ている者は、この宮廷には大勢いるのですよ」

ディアボは、妹の理路整然とした物言いに驚いた。いつの間にかここまで成長したのだろう。その言葉には相当の説得力があった。

ディアボは、兄と自分を比較して、実務能力も見識においても優れていると思うからこそ、自分が次期皇帝たらんと頑張ってきたのである。が、もし能力という物差しだけで次期皇帝を決めてもよいのであれば、自分の叔父や妹や弟達も競争相手となってしまうことを忘れていたのである。

そのことに気付いて見ると、この目の前に立っている妹はどうだろうか？

ゾルザルはこの妹を敵と親しすぎるといふ理由で競争相手と見なさなかった。彼女が所有する人脈を、利用することだけを考えていた。が、ディアボは逆に、敵国の軍事力

とピニヤの結びつきが恐ろしくなった。自分ならとつくの昔にその立場を利用しているからだ。

思わず背筋が寒くなった。

ピニヤこそが、最も帝位に近い立場にいるということをディアボはこの時、はつきりと意識したのである。

自分に都合の良い王族を王に立てて、同盟関係を結ぶということは帝国もよくやってきたことだ。軍事において圧倒的な日本という国は、今それをできる立場にあった。そして皇帝たる父が、そのことに気付いてない筈がない。

ディアボは皇帝の思考を推し量る。推し量ろうとした。

あまりにも材料が少ないが、ピニヤという存在を加味すると、ことさらにこの時期にゾルザルを皇太子に立てたことで皇帝が描こうとしている将来の図絵がぼんやりとだけが見えてきたような気がしたのだ。

日本という敵はお人好し。まともに戦わなければよい……。

その皇帝の言は、日本は利用しやすいという意味ではなからうか？ 民を愛し、義に篤く、信に過ぎる。そんな敵を利用するにはどうしたらいい？ ちがう、敵だった者すら味方にするにはどうしたらいいか？

それは、日本対帝国という対立の構図を変えてしまえばよいのだ。

どうやって？ その鍵となる者……………それがピニヤだ。

帝国内において、どうにかしてピニヤと皇太子ゾルザルが反目し合う政治状況を作る。一番良いのは、ゾルザルが軍事的な暴発を起こして日本との戦争を激化させることだ。ゾルザルに戦争を主導する役割を担わせる。そのためには一時的にでも軍事的な優勢か、優勢と錯覚させるような混乱した状況が必要となるだろう。これは政治とは別の技術的な問題なのであとで詰めることにして……。

もし、この構図が成り立つなら戦争を終わらせることを大義名分としたピニヤと日本の共闘は容易に成立する。日本の力でゾルザルを廃して、ピニヤが帝位に就くという目もあり得るわけだ。

こうなればそれまで敵だったはずの日本は、ピニヤと帝国の同盟者だ。これによって日本は帝国の覇権を支える後ろ盾となり、さらに帝国はその進んだ文物を他国に先んじて吸収することもできる立場となるわけだ。退位することで責任をとった父は、その玉座をめぐる争いとは無縁の立場となる。ある意味、ゾルザルを生け贄とすることで、自分を安全なところに置くことが出来るわけだ。

ピニヤのことだ、帝位に就いたとしても父を蔑ろにするようなことはしまい。とい

うより国政に携わる人材を自前でそろえられないピニヤは、兎にも角にも父の息のかかった者を用いざるを得ないのだ。つまり、裏で操ることが可能なのである。

「うーむ」

こうして冷静に考えてみれば、ゾルザルの語った「退位した皇帝対現役の皇帝たるゾルザル」という対立の図式よりも、ピニヤを隠し玉として日本という敵を味方としてしまう皇帝の絵図のほうが、遙かに現実的に思えた。

ゾルザルには父と競っていく意思はあっても、それを現実にしていく構想力で一步も二歩も劣っている。さらに、構想を具体化していく現実的な『力』にも欠けているのだ。

ディアボは、兄のはつたりにも似た詐術から目が醒めたような気がして、ホッとした。こうなればゾルザルに味方することは、大変に危険なことである。かといって皇帝に味方したとしても、ディアボには生きる目がない……。精々、父の傀儡たるピニヤの補佐をするだけの一生に成り果ててしまおう。

帝位を狙うディアボとしては、さらに考えるべきは、ピニヤの立場に自分が割り込むにはどうしたらいいかであった。それには、とにもかくにも日本と縁を結ばなくては成らないが、その点でもディアボは大きな後れを取っている。

ディアボは考える。

皇帝の構想を真似てみては……と。

皇帝は、ゾルザルと自身の対立という単純な図式を、ピニヤと組んだ日本という第三勢力を持ち込むことで、自分を天秤の支点とすることを試みている。

と、すればディアボに出来ることは、第四の勢力を構成することだ。そして状況に対するキャスティングボードを握ることで後継者争いの先頭に躍り出るしかない。

問題は何を味方とするかである。

諸外国や諸侯を糾合するというのも一手だ。勿論、皇位の座をめぐる争いに加わるには、帝国軍と互角な勝負に持ち込めるくらいの力は欲しい。もし、こちらに無いのなら、日本の国内、あるいは日本という国の外はどうだろうか。そういった力を持つ勢力はないのか？

「……………？ 兄様、また考えすぎておられるのでは？」

これだけの沈黙思考を続けていれば、誰もが変に思う。

「ゾルザルの兄様は考え無しなので困りますが、ディアボ兄様は考え過ぎるところがありますね」

ピニヤの呆れたような視線に気付いて、ディアボは自分の後ろ暗い思考を誤魔化すためか、あるいは考え過ぎる性格に対する非難を糊塗するためなのか、ことさら言い放った。

「いったい誰だ!? あのゾルザルをホントの大馬鹿に仕立て上げたのは」

「そんなに、馬鹿、馬鹿と貶さずとも……それに、ゾルザル兄様も、本当にそれだけの力をお持ちで、これまで韜晦してこられたのかもしれないよ」

「あり得ない! あれは馬鹿だ。だってそうだろう。皇帝たる父を恐れて、頭角を隠してきたのなら、父が亡くなるまで隠し続けているべきだ。それをこのような時期に暴露するなんて馬鹿でしかあり得ない」

「あの、兄上。いささか口が過ぎるのでは? 立太子された嬉しさに、自分を抑えきれなかっただけかも知れませんし」

「だってホントに馬鹿なんでもんっ、しょうがないじゃないかっ!! 俺たちが思っていたような小馬鹿だったら、まだマシなんだよっ!!」

それが身を守るために小馬鹿を演じているつもりで馬鹿に磨きをかけて、しかも、本当の自分は天才なんだと勘違いするぐらいの大馬鹿になっちゃったんだ、あいつはっ!! いいかピニヤ。大馬鹿は恐いぞ。なまじ変なところで小知恵がまわるから始末に負えないんだっ!! 小商売で成功して、大商売ですっこける大馬鹿商人が世に尽きぬように、あるいは天才とアレが紙一重なのと同じでな。大馬鹿はまわりを巻き込んで盛大に破滅してくれるんだ。

もう彼奴^{あいつ}のことはいい。問題はピニヤ、お前だ。お前も少しはこれからのことを考えておけよ」

最後のそれは、これからお前を中心にこの帝国が動いていくことになるかも知れないという警告であった。この帝国をどうするのか何の見識も持っていないようなら、後ろに立っている者（自分も含めて）がお前の背中を見ることになるぞ、という宣告でもある。「妾なら、どうの昔に考えておりますが」

「そ、そうか？ やはりな、そうでなくてはならぬ」

やはり帝位もその視野に入れていたようだ。油断のならない妹である。だが……勝負は最後まで分らないものだ。負けるものかとディアボは拳を握った。ところがピニヤの答えは、ディアボが予想したものの斜め上を行っていた。

「妾は、芸術の擁護者となります」

まるで自分の立場を理解していなかったのである。

* * *

テューレは、自らの首にかけられた革製の首輪をいまいましそうにむり取って投げ

捨てる、狭苦しい私室の、きしみを立てるほどの粗末な寝台に倒れ込むように身体を投げ出し、俯^{うつむ}せに横たわった。

二の腕や首には、痣^{あざ}や真新しい齒形痕^{あざ}が残っていた。ごしごしと指で擦ってみても肌からその痕跡が消えることはない。擦ったところで消えることがないことは分かっているが、擦らずにはいられない。そんな心境であった。

「……………」

小さなため息を一つ。すると寝台の下からくぐもった嗚^{なげ}れ声が聞こえた。

「テューレ様。ポウロでございます」

横たわったまま、まるで寝言のように応じるテューレ。

「なに？」

「アルヌスへ送り込んだ手の者からの報告が参っております」

「そう。そこに置いておいて、後で読むから」

何もかも忠節故とは思って感謝こそするが、今は疲れ果てている。こんな時はどのような親しい者であっても他人の存在は疎ましく感じるものだ。

報告を届けるだけなら用件も終わったことだし、これでポウロも去るだろうと期待する。だが、テューレの忠臣は立ち去らなかつた。

「テューレ様。ゾルザルが皇太子となれば、いよいよ帝国も終わりでございますな」

思わず無音の舌打ちをするテューレ。見えないことを良いことに、眉根を寄せて唇を噛んだ。さっさと立ち去れという言葉が、喉元まで上がってくる。だが、ボウロは彼女にとつて唯一無二の臣下であった。ボウロなくしては、自由のないテューレは、ゾルザルの籠かごの鳥とりでしかないのである。だから、あまり強い拒絶も出来なかった。

この醜男しこおは報酬を求めているのだ。忠節に報いるのに報酬は当然のこと、であるが……
テューレはうんざりとした気分になる。ゾルザルに続いて、この男にまで。

テューレは頭を抱えつつも、寝返りをうつように俯せから仰向けになると、ベッドの淵から片足を落とした。

やがて、水の滴り跳ねるような音とともに、足をナメクジの這いずるような感触が伝わってくる。唇を噛んで不快感を堪えつつ、テューレは、気を逸らすように言った。

「アレを煽おたり上げて、自信過剰にまで追い込むのにも苦労したのよ」

貴方は偉大な人、本当はできるのに他人は貴方を評価しない。それは天才を凡人は理解できないから。言いたい人には言わせておきなさい。貴方のことは私が存じています。貴方は力強くて凛々りんりゃしい。その颯爽とした振る舞いに人々は目を惹かれます。貴方が、いえ、貴方だけが真に正しいのです。

貴方は素晴らしい。貴方の発想は斬新すぎなのです。凡俗には理解できません。

天才は、凡人のようにあらねばならぬ理由はありません。したいようになさつてください、それが正しい答えです。

皇帝は貴方を恐れています。だから、立太子しないのではなく、できないのです。皇帝は恐ろしい人、貴方の慕っていた義兄を殺しました。その恐ろしい人物が恐れるのだから、貴方はやはり素晴らしいのです。義兄のように殺されないうちにもここは雌伏すべきです。才能を隠すのです。能力を隠すのです。無能を演じるのです。今の貴方は無能を演じているだけなのです。

テューレが甘い吐息と共に、彼の耳に注ぎ込んだ蜂蜜漬けの言葉は、ゾルザルの魂を確実に捕らえて太らせた。

彼女の語った耳心地のよい嘘を信じ、それを基盤としてさらなる嘘を信じ、それを信じるために自らに嘘を塗り重ねていく。ここまで来ると、本人は微塵も疑わずに信じ切っている。もとよりあった根拠のない自負心と自尊心がより膨れあがり、他人から吹き込まれた考えすら、自分の発想と錯覚する。それどころか、他人が自分の考えを盗んだとすら考えるようになってしまった。

「お人好しの異世界の軍など恐れるに足らない」、そんな皇帝の言葉が耳に入った途端、

「俺のアイデアを我がもののように言いやがって」と考えているのだ。

「でも、油断しては駄目よ。講和は何としても潰さないよ。何としても戦争を続けさせるの。火に油を注ぐの。この地上のヒト種が憎しみ合って、罵り合って、殺し合い、奪い合い、破壊し合って帝国が減んで、王国が減んで、街が減び、村が減び、ヒト種がこの地上から消えていくまで、決して手をゆるめては駄目。そうして初めて、私の復讐は完遂されるのよ」

「ならば良い考えがございます。ニホン人奴隷を始末いたします。たかが一人二人の同胞が奴隷となっていたと知っただけで、元老院を破壊するくらいなのですから、残りの者が殺されてしまったと聞けば、大いに理性を失うこと請け合ひでございます」

「たかが、一人二人の同胞が奴隷になっていただけで、怒り狂って攻めて来た」のくだりはテューレの胸中にあつた正体不明の苛立ちを怒りへと変えた。

自分の時には誰も助けに来てくれなかったというのにつ！

誰も助けてくれなかった。誰も同情してくれなかった。

誰も自分のことを案じてくれなかった。

しかも、生き残った仲間も、自分が一族を裏切ったという嘘を信じて、この身をつけ狙ってすらいると聞く。

それだけは、絶対に許せなかった。

自分は故郷を守るために自らを犠牲にしたのだ。なのに誰も、何も返してくれない、愛してくれないなどという理不尽は、断じて許せなかったのだ。そして、その怒りは同じ境遇にあつたにもかかわらず、救いの手が差し伸べられたノリコへも波及する。

「甘いわね。とつても甘い。私たちが手を下しては駄目。帝室の者に手を下させる方法を考えなさい。できればビニヤがいいわ。でも、無理ならディアボでもいい。どちらかにノリコを殺させるの。そうすればニホンと帝国、そして元老院と帝室の関係も最悪となるでしょう。戦争は続く。果てしなく続くわ。戦争が大きくなる。ヒト種が殺し合つて大地は骸で覆われる。父と母と弟と一族の故郷を亡ぼしたゾルザルも、帝国も、何もかもが滅びるの。それは私にとつて、大いなる喜びなのよ。そうすればボウ口、私はお前の望みを叶えましょう」

テューレの腿にまで舌を這わせていた豚と犬をかけ合わせたような醜い男が、瞳を輝かせてその表情を歪めた。笑ったのだろう。

「かしこまりましたテューレ様。乏しい智慧を絞ってみます。ですからお約束、なにとぞお忘れ無く。いひひひひ」

アメリカ、カナダ、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、ロシア、中国、そして日本の外相の集まる会議の場で、嘉納太郎は耳につけたインカムにふさがれた耳の穴が蒸れるのを、じゅくじゅくと痛痒く感じていた。

通訳の声が流れるインカムを外して、何度か外耳道の空気を入れ換えようと試みる。だが生来の熱しやすい体質に加えて、交わされるやりとりの内容が彼の情緒を強く刺激するようなものであったために、いささか体温が上がり気味なのだ。それを抑えるのにも、理性の総動員が必要だった。

嘉納はため息を一つつくと、斜め前方に座るロシアのウラジミール外相に向けて語った。

「そのような要求は到底受け容れかねる。銀座と言えば、我が国の政治経済の中枢、首都東京である。そこに武装した外国の軍隊を無条件で受け容れるなど、どうして出来ようか。まして我が国は貴国ロシアを信用できない。グルジアの南オセチア州でなされた極悪非道の侵略行為はつい最近の出来事である」

通訳が嘉納の日本語をロシア語に翻訳するのに、若干のタイムラグが生じる。この間に、嘉納は机の上に置かれたミネラルウォーターを口に含んで一息ついた。顔色を変えたウラジミールが、嘉納に向かって強い口調で何か言い始めたが、ロシア語など分からない嘉納は、それが日本語に翻訳されるのを素知らぬ顔で待つだけである。

通訳の翻訳は以下のようなものであった。

「そのような悪意に満ちた誹謗を我が国は受け容れるわけにはいきません。南オセチアにおける我が国の軍事行動はあくまでも自国民保護を目的としたものであり、非難されるべきは、民族浄化を図ろうとしたグルジア側にあります。我が国の軍事力の行使はあくまでも適正なものであり、何一つ非難されるようなものはないのです」

嘉納は「わらっちまうぜ」と肩を疎めながら、隣の外務次官へと一旦視線を向けた。外務次官は、この表舞台とは別の場……すなわち裏で為される影の交渉（別名「テーブル下の交渉」）の結果、アメリカ、イギリス、ドイツの賛同を得たことの報告を得て嘉納にメモを示した。

メモには「概ね賛同を得る。条件次第」と書いてあった。

「俺が見たのは、報道関係者に向かって銃をぶっぱなすロシア兵の映像とか、そんなんばっかりだったぜ……」

通訳が嘉納のべらんめえ口調をどのように翻訳したのかは分からないが、相当に刺激

的な意識だったらしい。

ウラジミールはテーブルを拳で叩くと、顔を真っ赤にして腰を上げた。

「それは西側報道機関の捏造です！」

「現場生中継を捏造とはちゃんちゃらおかしくて嗤えるねえ。後々になって出してきたロシア側の新証拠とやらの方が捏造だろうに。いずれにせよ、我が国は貴国を信用できない。よって、ロシア側の要求は断固拒否する」

ロシアの外務大臣は、握り拳を作ったまま他国の大臣の顔を見渡した。

この主要国外相会議は、経済や政治上の様々な問題を検討するために設けられた。当然、日本国の東京に忽然と現れた『門』という現象も議題に上った。

それは日本国内で起きた出来事であるが故に、本来は日本だけの問題であった。そして『門』は日本だけの物のはず。

だが、その『門』が多なる利益をもたらすことが分かると、『門』がもたらした負の利益、戦災のことは忘れ去られて利益ばかりが注目を浴びたのである。

各国の要求は、すなわち「独り占めするな、こっちにも寄越せ」というものであった。『門』に多大な興味を示しているのはここに集まった八カ国ばかりではない。韓国、インド、台湾、ブラジル、メキシコ、オーストラリア、シンガポール等々、新興の国々が

そろっている。

首相の森田はこうした国々の国際圧力に屈する形で、大幅な譲歩を決断したのである。もちろん譲つてばかりというわけにはいかない。日本には日本が求めるべき国益というものがある。人の家に欲しいものがあるからといって、土足でずかずかと上がつて良いはずがない。言うべきは言い、突っぱねるべきは突っぱねなければならない。

閣議における嘉納や夏目の主張が取り入れられ、総論において受け容れても、各論において非常に強い制限を加えていくという方針が定められたのである。

こうして『門』の利用や、日本が他国を受け容れるための枠組みづくりが、ここに集まった八カ国で取り決められようとしていた。

今度は中国の外相が発言を始めた。

「我が国は、日本国が特地において、かつての帝国陸軍のような蛮行を行っていることを危惧しています。東京の治安や安全を脅かそうという意図はないので是非信用していただきたい。我々が求めるのは特地に立ち入り、日本軍の活動を監視し、我が国の権益を守るための最低限の戦力を受け容れていただくことだけである。あまりにも頑なに拒絶する態度は、何か人に見られたくないような行為をしているのではないかという疑念が生じるので注意していただきたい」

嘉納は、似たようなことを韓国の大使が言っていたことを思い出した。

「安心していただきたい。日本国は第二次世界大戦に敗戦して以来、民主主義の国家となっている。ウイグルやチベットで某国が行っているような武力弾圧とか虐殺とかは一切していない。実際、我が国の野党が現地の住民を国会に招致して意見を求めたが、自衛隊の行動の適正さを証言してくれたくらいである。それでも疑わしい、どうしても見に来たいというのであれば、受け容れることも吝かではないが、当然のことながら条件がある」

続く言葉を各国の外務大臣達は身を乗り出して待った。

「まず『門』が東京にある以上、特地に入るには必ず東京を通過しなければならない。だが、一国の政治経済の中枢に、他国の軍事力を受け容れさせるといふ非常識をこの外相会議が強い以上、以下の条件が認められなければならない。

それは、日本国領土内を通過する段階では、各国の軍隊、それに所属する兵士は、我が国の法に従わなければならないことである。我が国は武器管理においては厳重な法の規制下であり、銃砲火器刀剣等の携行は絶対に認められない。

これらの装備を特地まで輸送するに当たっては、分解し、完全に梱包し、弾薬なども我が国の爆発物取り扱い等の法に従って移送されなければならない。またこれらの輸送

も、我が国の法に従って肅々と為されなければならない。則ち交通ルールを守れということだ。

守られなければ当然、我が国の法に従って、刑罰を受けることとなる。また、これらの条件が適切に為されていることを確認するために、荷物等の検査も当然ながら受けていただく。これの拒絶もまた、ペナルティの対象となる。

もし方が一、外国の兵が、武装して『門』を出て銀座の土を踏んだら、我が国の法を犯した者として、その理由の如何を問わず、当該将兵はその場で射殺され、車両等は撃破される。また、その兵の所属する国家は、不法行為に対する賠償として兵士一人あたり米貨にて百万ドルの罰金を支払っていただく。さらに我が国の建物や施設財産等を損壊させた場合も、それに見合った額を加えて支払っていただく。

なお、これらの金員は、あらかじめ保証金として我が国に預けていただく……従って、特地へ派遣する兵の人数に応じた保証金を積んでいただくことである。十人なら一千万ドル、百人なら一億ドルということである」

もう、この段階で各国の外務大臣の顔は真っ青だった。

日米安全保障条約があるアメリカの外相だけは、苦笑いしている。米兵が武装したまま日本国内を移動することは、条約で認められているから、これらの条件はほぼクリア

されるのである。問題は保証金だが、日米の関係においては、返還させることが決まっている限り何の心配もない。さらに、『門』から得られる利益はこれを度外視できるほどに大きいと試算されているのだ。

またイギリス、ドイツも、顔色を青くしながらも、次官とひそひそと何やらメモをやりとりしながら検討していた。

実は、両国とも大昔のようなやり方で特地に領土や権益を広げる意図を放棄していたからだ。両国ともアメリカ同様に、小さな『門』しか補給路のない特地に、大軍を派遣することの危険性に気付いたのである。従って、日本を応援して分け前を貰うという方針に切り替えていた。

そうなるに必要な戦力は形ばかりの監視と、特地の情報収集に必要な少数人数でよいことになる。その程度なら両国とも保証金は問題にならないと考えたのである。

カナダやイタリヤは、何やら補佐官とひそひそとやって、本国と連絡を取り合っている様子が見受けられる。これも机の下の交渉が進んでいて、各論の問題で交渉になっても、総論では受け容れることになるだろう。

問題は、現代にもなお海外植民地を有するフランス、武力侵略もへっちゃらなロシア、領土領海の拡張と異民族の武力弾圧に余念のない中国であった。これらの三国は、日本

の要求に対して苦い顔をして首を振った。

これらの国は、百年ほど昔になされたような、植民地的な権益を狙って特地に対する軍事力の大量投入を考えていたのである。

補給物資等の輸送の問題についても、フランスにはそれなりの考えがあるようだが、中国やロシアは自国と日本が近いこともあって、さほど輸送距離もなく、さらに自国で普段当たり前にやるようなノリで軍事優先が通じると思い込んでいるのだ。そのために日本の道路事情の特殊性に考えが至っていない。

さらに中国は、増えすぎた人口を、特地に移民させるという^{あらかわば}荒業を考えていた。

自国民を移住させて、自国民保護を理由として軍事的に支配していくやり方だ。しかし、これだと送り込む人数に応じて保証金を積みという日本の要求には、当然のことながら頷くことは出来ない。

「我が国が、日本国の経済や政治に悪影響を及ぼすような行為をするはずがありません。従って、このような過剰の保証金は不必要だと思われます。それに、兵士が武装したまま『門』から東京に出たというだけで、その場で死刑とはあまりにも野蛮なことです。どうぞ、再考していただきたい」

嘉納は、フランス外相の言葉に対してこう答えた。

「嫌だ」

何を言われたのか分からないのか、フランス外相は目をパチクリとさせている。

「なんと言われましたか？」

「お断りすると申し上げた。これらの巨額の保証金は、過剰な戦力を入れることを防ぐためだからである。我が国は特地の秩序を乱したくない。特に、現在は特地内の『武装勢力』と非常にデリケートな交渉の真つ最中であり、これをいたずらに混乱させれば、終わる戦争も終わらなくなってしまうおそれがある。また、フランスは我が国の政治・経済の中枢を混乱させたり、攻撃したりするおつもりか？」

「そんなことあるはずがありません」

「『門』を越えてフランス兵が銀座に出て来るおそれは絶対にないと言いつけるか？」

「無論」

ならば、問題ないでしょうと嘉納は大きく切り出した。

「フランス兵が銀座に武装したまま出て来ることなど絶対にないと言われるのであれば、多少重めのペナルティを決めておいたところで心配する必要はない。誰も罰されるような事は起きないのだから。そうでしょう？ それとも誰か罪を犯す予定がおありですか？」

立ち読みサンプル はここまで

嘉納のこの言葉を最後に、この日の会議は終了することとなった。

* * *

一方、世界の思惑や水面下の動きを余所に、伊丹いなはアルヌスの街をうろろとしていた。嫌な予感がした。

ものすごく嫌な予感がしたのである。

柳田やなぎだの言った金髪エルフと言えば、このアルヌスではテユカしかいない。

伊丹はテユカが嫌いではない。いや、どちらかというと好きな部類に入る。……正直に言えば非常に好みである。

見栄えだけ取り上げてみても、彼女の魅力を数え上げるのに苦勞を要しない。美しい顔立ちに、透き通る蜂蜜のような髪、そして温もりを感じさせる肌に包まれた、ほっそりとした肢体等々。フィギュアにして飾っておきたいくらいだ。

その碧い瞳あおは、伊丹には見えない精霊の類を見通す力があつて神秘的ですらある。

もし彼女が何も抱えていなければ、もっと積極的に話をしたいと思つたらうし、もっと関わりたいと思つたらう。だが、伊丹は彼女との間に越えられない壁の存在を感じて、